



小説の未来 (15)

国家の証明

春日信彦

架空と現実

すでに、小説は架空の世界であり、人間関係を詳細に描く言語芸術作品だと述べました。小説には、幾人かの人物が登場しますが、その時、彼らの家族における相互関係と他の家族との相互関係が多方面から描かれます。

そこで、家族ですが、家族は親子を中心とした組織です。人は人から生み出されます。だから、たとえ、地下のマンホール内で生活している孤児であっても両親はいます。そう考えれば、地球上の人類は家族の集合体と言えます。

家族は、次第に小集団を形成し、それらは侵略戦争を繰り返しながら、大集団を形成していきました。ついには、その大集団は、軍隊を持つ国家を形成しました。また、各国家は、国家権力をもってパワーバランスを作り出しました。さらに、パワーバランスを具現化するために明確な国境までもが作り出されました。

戦場から逃れるため国家を脱出した難民と言われる人々がありますが、すべての人は、どこかの国家に属していると言えます。だから、登場人物を描くということは、彼らにかかわる家族と彼らが属している国家を描くことになります。

小説は、架空の世界を描くと述べました。ということは、家族も国家も架空と言うことになります。では、架空の家族や国家を描いて、どのような効果があるのでしょうか？

家族や国家は、現実の姿をありのままに描写した方が読者には実感がわいて有用的ではないか、との意見が一般的なように思われます。でも、あえて小説が架空の家族や国家を描くということは、やはり、何らかの有用性があるからなのです。

私たちは、家族の構成員ですから、自分の家族を通して家族を認識しています。さらに、実感できない国家においては、日々の事件を報道するテレビや新聞で認識しています。そして、それらの情報をもとに自分なりの国家観を作り上げています。

と言うことは、それぞれの人たちは、自分の感性と言語に基づいて家族や国家を認識しているのです。そのように考えると、家族観も国家観もその人固有のものだと言えるのです。

たとえば、ある番組に呼ばれた国会議員が、日本国家は軍事力を中心とした自由経済主義国家を目指すべきだ、と叫んだとします。たとえ彼が国家を代表するような大学の博士号を持っていたとしても、その考えは、彼の国家観にすぎません。

また、子供の貧困は犯罪の増加と学歴格差拡大の原因となると考えた主婦が、日本国家は貧困をなくす福祉国家を目指すべきだ、とデモで訴えたとします。これも、彼女の国家観にすぎません。

つまり、現実の国家は明確に認識できるようで、意外とあいまいなものなのです。私たちは、現実世界に住んでいるから現実を認識していると思っています。でも、そうでない場合が多いのです。身近な例として、太陽は、東から西に動いているように見えますが、実は、地球が動いているから太陽が動いているように見えるのです。

そこで、現実世界の認識をより客観的に把握するために、小説が描き出す架空世界と我々が認識している現実世界を比較してみるのです。

言語と国家

私たちは、現実世界に生きています。だから、その人なりに現実をある程度認識しています。では、認識とはいかなるもののでしょうか？目で見えたもの、耳で聞こえたこと、指で感じ取ったもの、鼻で匂いとして感じたこと、舌で味覚として感じ取ったもの、など五感で把握したものは、現実の認識と言えます。

さらに、言語でも現実を認識しています。実は、文字と音声でとらえた現実こそが、自分が思っている現実に近いのです。と言うことは、その人それぞれの言語中枢によって、それぞれ異なった現実が生み出されているということなのです。

小説は言語の集合体です。だから、小説が作り出す架空世界も言語の集合体でしかありません。国家について言えば、小説が生み出す国家は、言語の集合体としての国家と言うことです。ならば、実体はないのか、と言われるでしょう。

その通りなのです。当然、架空の国家には、実体はありません。では、現実の国家には、実体があるのでしょうか？ほとんどの方は、現実の国家には実体があると主張されるでしょう。でも、私には、そのように思えないのです。

実のところ、国家は、実体があるようでないのです。というのは、現実の国家においても、私たちは、言語でしか国家を認識できない、と言っても過言ではないからなのです。そして、言語で作上げられた国家を現実の国家だと私たちは思い込んでいるのです。

多くの方は、いや、そんなことはない。絶対、国家には実体がある、と言われることでしょう。現に、政治があり、国境があり、選挙があるじゃないか。また、国益があったからこそ、戦争をしてきたのだ、と言われるでしょう。まさに、戦争を正当化する国益と言う亡霊が誕生したために多くの人々は殺し合いをしてきたのです。

国家は人からなる組織です。だから、人の組織であれば、人という実体がある。確かに、国家においても、生物的な実体として存在するのは、一人一人の人間だけなのです。そこで、生物的な実体に重きを置いて国益を言い換えると、「国民一人一人の利益」と言うことになるのです。

そのように言い換えれば、人を殺すことは、その人の利益を奪うことになります。であれば、国益のために人を殺すということは、あり得てはならないことなのです。でも、歴史的に、呪術師のような国家に惑わされた国民は、国益という大義名分を妄信して殺し合いをやってきたのです。

そう考えてみると、国家の実体は、一人一人の人間ではないということなのです。やはり、国家には実体がない、というほかないのです。国民が国家と言っているのは、言葉で作られた国家観にすぎないのです。それでも、国家の実体を強調される方がいるでしょう。

国家は、固有の文化や言語を持った民族集団だ。国家には国民を統治する政府がある。現に、市役所や県庁で多くの公務員が働いている。など意見が聞こえます。なるほど、もっともな意見でしょう。でも、それは国家の実体を意味しているのでしょうか。

国家公務員や地方公務員は、国家と国民のために働いています。税金収入の分配を受け取る彼らも、企業収入の分配を受け取る社員も、同じ国家の労働者なのです。彼らが公務員だからといって、彼らの存在をもって国家とは言えないのです。というのも、国家は、国民によって成り立っているにもかかわらず、国民の意思と乖離（かいり）した国家意思と国民をコントロールする国家権力を持っているからなのです。

そこで、声高に言われることでしょう。国家権力の背景には多くの兵隊からなる軍隊がある。軍隊を発動させる大統領や首相がいる。彼らは、まさに実体だと。でも、やはり、彼らは、一定の役割を遂行する人間であって、国家の実体ではないのです。

先ほど述べたように実体としてあるのは、一人一人の人間なのです。どんなに人間が集まっても、人間でしかないのです。ところが、大脳新皮質の機能から生産された言語が、魔法のような働きをして、人間集団を国家という非生物的で凶暴な亡霊に変身させてしまったのです。

国家の証明

国家とは何か？これは、人間とは何かを問うことにもなります。森村氏の小説に「人間の証明」という作品があります。秀才の彼は、彼なりの条件設定を行い、彼なりの手法で人間を証明されました。この歴史に残る証明でさえも、無限にある証明のうちの一つにしかすぎません。

一人の人間を生物学的に証明するのは、現在の科学をもってすれば可能かもしれません。でも、人類は言語を作り出し、さらに国民をコントロールする国家までも作り上げてしまいました。この段階では、人間を証明するには、国家をも証明しなくてはなりません。

人間と国家を証明する場合、無限の条件設定が考えられます。実体のない国家を果たして証明できるのでしょうか？国家は、生物である人間の組織集団ですが、出来上がった組織集団は、生物学的な人間集団ではないのです。だから、国家を証明するには、もはや、言語を使って証明する以外ないと思われます。

当然、国家を証明するには、条件を明確にしなければなりません。でも、国家の条件とは、いかなるもののでしょうか？選挙があつて、国会議員がいて、公務員がいれば、国家なののでしょうか？それらは、単に人々を役割によって区別したにすぎません。

国家の歴史から国家の実体を解明しようと研究なされている学者が多々いらっしゃいますが、国家は、人類の良心を無視するかのように、日々人類に殺戮（さつりく）を強要し続けているのです。ふと思うのです。「人間と国家の証明」の問題は、殺戮を繰り返す人類への天誅（てんちゆう）ではないかと。